

## 「一人のゲラサ人の救い」(ルカによる福音書八章二六～三九節)

### 1 悪霊につかれたゲラサ人

教会においても、あるいはキリスト教学校においても、何より重んじられている聖書、この聖書には、いまの時代の私どもの生活感覚からして、あまりピンとこない言葉や概念が少なくありません。

今日の聖書箇所に出てくる、汚れた霊、悪霊、悪霊ども、なども、まさにその代表的なものの一つです。

悪霊に関わる一種異様な物語、出来事、それが今日の聖書箇所です。ここで起こっていることを理解するために、はじめに、「悪霊」について説明しておきます。悪霊について言うためには、それと深く関係している「悪魔」を最初に取り上げないわけにはいきません。

まず悪魔です。聖書の世界観では、悪魔は神に敵対し、人間を神に背かせる、誘惑する一つの人格的な存在(人間のような存在)と考えられています。サタンともベルゼブル(マタイ一〇・二五)とも呼ばれます。ベルゼブルの意味は不明ですが、サタンは反対者とか敵という意味です。

そして悪霊(デーモン)——「悪霊ども」と複数でも出て来ます——、これは、いま言った悪魔(サタン)の配下、サタンの下で働いている、いわば家来のようなものです。旧約聖書でも新約聖書でも、様々な禍を人間にもたらすものとされていて、色んな病気、精神的な病気もふくめて、みなこの悪霊の仕業、悪霊によって引き起こされるものと当時考えられていました。

悪霊の存在とそうした活動を聖書も認めています。しかし同時に聖書は、悪霊も、その頭(かしら)の悪魔も、神の支配下にある、神の支配を免れていない、と考えています。ですから聖書は、イエスによって多くの病が、悪霊に憑かれた者もいやされたことにおいて、神の国がそこに来ていると見ているのです。その意味でイエスはメシア(キリスト)、本当の救い主なのです。

さてこのまさに悪霊に関わる今日の箇所、少し複雑ですので、ここで起こったことの概略を申し上げます。

場所は、イエスがふだん生活しているガリラヤ湖の、たとえばカファルナウムという町から見て対岸、ゲラサというところです。

そこに一人の悪霊に取りつかれた男がいました。イエスと弟子たちは舟に乗ってゲラサの地に福音の宣教に行きます(八・二二)。上陸するとすぐ、一人の男が、何やらわめきながら出て来て、イエスを見たたん、自分にかまわないでくれ、苦しめないでくれと言うのです。

イエスは何もしていないように見えるのに、なぜそう言うかといえば、その理由はこの男に取りつかれている悪霊に向かってイエスが、この男から出て行けと命令したからにはかなりません。つまり、この男と悪霊はまさに一体化しているので、男からすれば、自分にとって大事な、自分の分身ともいえるべき悪霊が出ていったら、自分とし

ては生きていけない、だから苦しめるな、かまわないでくれというわけです。この男だけでなく、この男に取りついた悪霊たちも（複数です。たくさん取りついているのです）同じようなことをいいます。イエスに、われわれを滅ぼさなしてくれ、「底なしの淵」（いわば地獄）へ行けなどと命じないでほしいと懇願するのです。イエスがそうした力をもった存在であることを認め、敬意を払っているかのようです。

男に取りついていられなくなることを悟った悪霊どもは、宿る場所を変えて何とか生き延びようとします。近くの山にいた豚の中に入り込むことをイエスに許してくれるように願うとイエスは許します。悪霊の住む場所を許可する権利もイエスがもっているかのようです。

悪霊どもが豚に入り込むと、豚の群れは、突然駆け出し「崖を下って湖になだれ込み、溺れ死んだ」のです。ものすごい光景です。これはまた後で触れることがあると思います。

豚飼いたちは逃げだし、町に行つて、起こったことを知らせます。人々がその豚の群れの一件を見ようとしてやってくると、彼らの目に入ったのは、悪霊につかれた男が正気になってイエスの足もとに座っている姿でした。一部始終を見ていた人は、この男がイエスによって救われた次第を語り、伝え聞いた町の人はすっかり恐れにとらえられたというのです。

この男は、というと、ともかく彼から悪霊が出て行ったわけで、正気に戻り、イエスの足下に座っています。そしてお供をしたい、弟子になりたいと申し出ます。しかしイエスはこれを許しません。むしろ家に帰って神があなたに為したことを話してきかせなさいと命じます。これに従い男は、町中に、イエスがしてくださったことを語り伝えたというのです。

## 2 悪霊とは何か

何がここで起こったのか、いま簡単に辿り直してみました。よく考えれば、ここに書いてあるのは、たいへん気の毒な一人のゲラサ人がイエスによつていやされた、あるいは救われた（三六節）ということです。その上さらに彼はイエスを宣べ伝える者となった、そのことがここに語られているのです。この単純な事実を、まずは見誤ることのないようにしたいと思います。

それにしても悪霊に取り憑かれていたときのこの男は、まことに異様で、気の毒なものでした。

この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた（二七節）。

この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた（二九節）。

ここには、男のことが、三つの観点から描かれています。第一に、裸で、墓場に住

んでいたという彼自身の現状の客観的な描写です。

第二に、町の人とこの男の関係です。男を、町の人は、鎖や足枷で押さえつけ、監視していました。たんにあばれないようにしたというのではない。人々は墓場に、いわば虚無と死の側に男をつなぎとめ、こちらに、命の世界に出てくることを恐れ、嫌ったのです。

第三に、この男の気持ちを垣間見させるような観点から描かれています。彼は、彼を縛り付けていた鎖や足枷を「引きちぎった」と書いてあります。それは彼が、本能といったらよいでしょうか、根本のところ、自由への欲求をもっていたということではないでしょうか。彼もまた、異様なゆがんだ姿においてであれ、自由を渴望してやまない人間なのです。

こうして彼は無意識に鎖を引きちぎり、足枷をくだいて、自由になります。しかし彼の悲惨は、そのようにして得られた自由の中で幸福を得ることができず、いよいよ悲惨にならざるをえないところにあります。彼は自由になった。しかしこの自由は悪霊に利用されます。彼は悪霊に「駆り立てられ」、荒野へと向かい、墓場を徘徊するほかないのです。悪霊に取りつかれるというのは、たんに自由を奪われることではなくて、自らの自由が悪霊に利用されること、自ら進んで拘束されること、不自由へと突き進んでいくところにあるのでないでしょうか。ひところ、いまま問題は根深く残っていますけれど、新興宗教、あるいはカルトなどによる若者の「洗脳」という問題がありました。それも構造はこと同じです。

先ほど、悪霊に乗り移られた豚の群れが、一斉に走り出し、崖を下って湖になだれ込み、みな溺れ死んだことにも触れました（悪霊が死んだわけではありません）。ここに悪霊の本質のようなものが現れています。人も動物も、有無をいわせず、一方方向に追いやってしまうもの、それが悪霊だとすれば、いまの時代の私どもも、そうした悪霊のような力から決して自由ではないのです。

現代における悪霊の代表格はお金、富であるかも知れません。今日それは「経済」という言葉であるかも知れません。富を所有することは、旧約ではとくに、神の恵みのしるしです。しかし関係が逆転し、富が人を支配し、使役することがしばしば起こります。富（経済）が神となり人を走らせます。そのとき富は悪霊、マンモン（富の神）です。イエスが、私どもに「神と富」に兼ね仕えることはできないと警告している通りです（マタイ六・二四）。

### 3 新しい使命

こうして人間から自由を奪い、人間を命の世界から死の世界（墓場）へとくり返し追いやっていくもの、悪霊、この悪霊から人間を解放するために「いと高き神の子イエス」は来られたのです。

救われ、解放された男の様子がこう書いてあります。

人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座

っているのを見て、恐ろしくなった(三五節)。

悪霊どもを追い出してもらった人が、お供したいとしきりに願ったが、イエスはこう言ってお帰しになった。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」。その人は立ち去り、イエスが自分にしたくださったことをことごとく町中に言い広めた(三八〜三九節)。

これによると、この男の様子は、イエスとはじめて出会ったときと、正反対になっていました。ここでとくに注意したい言葉の一つは「イエスの足もとに座っていた」ということです。ここには悪霊に駆り立てられ、意味もなく墓場を徘徊していた男の姿はありません。

「イエスの足もとに座っていた」——それは、イエスの語るみ言葉に聞いていたということですから。いまイエスは先生です。この男は、み言葉を学ぶ生徒です。自分と悪霊の区別がつかないような状態には彼はありません。醒めた、しっかりした判断力をもってみ言葉に聞きます。かつて使徒パウロが、ダマスコ郊外で、復活のキリストに出会い、回心した出来事を思い起こします(使徒九章、他)。彼もまた憑きものが落ちたようになって、自分の新たな使命を、自分の新しい生き方をイエスに問い、それを待っていたのです。

悪霊の支配から神の支配に移されることは、主人が変わってそれで終わりというわけではありません。その人の生き方も変わらざるをえないのです。イエスが舟に乗って帰ろうとすると、彼はお供したいと願い出たとあります。ちよつと思いついたのではなく、「しきりに願い出た」とあります。イエスを主として従っていきたいと彼は願いました。イエスからもはや離れることはできないと考えたのです。イエスなしに生きられないと思っただけです。

しかしイエスはこれをお許しになりませんでした。むしろイエスは家に帰るように命じられたのです。生業を捨てたペトロやヨハネ(マルコ一・一六以下)らの弟子たちとは別の使命がある。イエスは彼を家族伝道に遣わされたのです。同じことを伝えているマルコには家に帰って「身内の人に」(五・一九)語りなさいとあります。君が新しい責任を果たすべきところはそこだと言われたのです。そこで信仰によって生きよと語られたのです。

ある意味でこれはもつとも困難な課題です。私どもにとつてもそうです。この男にとつてはことさらそうだったでしょう。墓場で叫び、鎖を引きちぎり、裸で歩き回っていた、それをくり返していた。これが彼の過去です。いま家に帰ってどうなるのでしょうか。しかし聖書によればこの使命に彼がよく生きることが分かります。内村鑑三が、入信したあと、頑固な父に伝道し、何度も聖書を送りつけ、熱心に祈り、やがて家族みんなをクリスチャンにしたことを思い出します(『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』鈴木訳、岩波九五頁)。

この男は家族に伝道しただけではない。「町中」で伝道します。「イエスが自分にしてくださったことを」彼は宣べ伝えます。その中心に主イエスがいます。心の中にあのイエスがしっかり生きているかぎり、彼も私どもも、どこでもイエスを伝え、証しすることができるのです。